

6

第二次大戦後のわが国 80 大学の
医学教育カリキュラムにみる“アメリカ医学”の変容

逢見 憲一

国立保健医療科学院生涯健康研究所

【目的】わが国の医学教育の歴史を通して、第二次世界大戦後の日本の医学教育制度の長所と短所を分析し、現在の課題を提示する。

【方法】わが国の医学教育の歴史について、とくに第二次大戦後から現在に至るいわゆる“アメリカ医学”時代に着目し、医学教育カリキュラムを長期的・経時的に比較分析した。

【資料】全国医学部長病院長会議. 医学教育カリキュラムの現状. 昭和50年(1975)版, 平成3年(1991)版, 平成23年(2011)版.

【結果】わが国における大学医学部および医科大学(80大学)で医学教育に必要な全時間数の平均は、1975年には6,312時間であったが、2011年には5,337時間と、約1,000時間減少していた。全教育時間を、一般教養、臨床(講義)および臨床(実習)に3分して時間数の平均をみると、一般教養の時間数は、1975年の1,716時間から2011年には608時間と1,000時間以上減少していた。臨床(講義)は同期間に2,757時間から1,923時間とやはり約1,000時間減少していた。一方で、臨床(実習)の時間数は1,779時間から2,727時間へと約1,000時間増加していた。これらの医学教育機関を、伝統的・新設および国公立・私立に分けると、一般教養の時間数は、1975年には伝統的国公立校が1,608時間、伝統的私立校が1,945時間、新設国公立校が1,761時間、新設私立校が1,767時間と、伝統的国公立校よりも私立校あるいは新設校の方が多い傾向にあったが、2011年になると、伝統的国公立校が762時間、伝統的私立校が723時間、新設国公立校が687時間、新設私立校が677時間と、伝統校よりも新設校の方が時間数が少なく国公立校よりも私立校の方が時間数が少ない傾向へと変化していた。とくに旧帝国大学では、1975年には1,616時間と全機関平均を下回っていたが、2011年には1,066時間と全機関平均を300時間以上上回っていた。意外なことに、全医学教育機関の最終学年の教育時間数(実習を含む)の平均は、1975年には997時間であったが、2011年には532時間とほぼ半減していた。これを伝統・新設および国公立・私立に分けると、1975年には伝統的国公立校が957時間、伝統的私立校が1,163時間、新設国公立校が809時間、新設私立校が924時間と、新設校よりも伝統校の方が時間数が多く、国公立校よりも私立校が多い傾向にあったが、2011年になると、伝統的国公立校が549時間、伝統的私立校が544時間、新設国公立校が602時間、新設私立校が407時間と、新設国公立校の時間数が多く、次いで伝統的私立校と伝統的国公立校、そして新設私立校の時間数をもっとも少ない傾向へと変化していた。

【考察】1975年から2011年の間に医学教育の全時間数は減少していたが、一般教養の時間数減少は全時間数減少を上回っていた。臨床教育(講義および実習)の時間数はわずかに増加していた。一般教養の時間数は、すべての医学教育機関で大きく減少していたが、伝統校とくに旧帝国大学においては、わずかながら減少への抵抗がみられた。また、最終学年の教育時間数(実習を含む)は、1975年から2011年にほぼ半減しており、その傾向はとくに新設私立校に顕著であった。

近年のわが国の医学教育における教養軽視・国家試験のための詰め込み教育重視の傾向は、従来考えられていた“アメリカ医学”をモデルにしたものとは考えにくい。政治学者丸山真男のいう“執拗低音”(通奏低音)として、江戸時代の町医者、明治から第二次大戦前の医術開業試験合格による開業医の類型が第二次大戦後の医師の志向の背景にあるのではないかと考えられる。